



## 学びの共同体とは

今回のすなっぴは、全国の多くの学校で取り入れられ話題になっている「学びの共同体」の実践をすすめる伊勢崎工業高等学校の荻戸（のぞきど）貴利先生（数学）の登場です。

「学びの共同体」とは、教育学者で東京大学名誉教授の佐藤学氏が提唱するもので、子どもだけでなく、教師も、保護者や地域住民も学び成長する学校を言います。

- 子ども一人ひとりの学びを保障し、すべての子どもが授業に参加する。
- どの教室も同僚や保護者、地域に開かれている。
- 教師全員が同僚に授業を公開し、授業での事実をもとに研究会をする。
- 保護者や地域住民が授業に参加する。

この4つの考えに基づいて実践が展開されていますが、主に小・中学校での実践が多く、茨城県では高校の3校を含めて30校で、学校としての取り組みが行われています。

## 群馬県をリードする荻戸先生

群馬県内では学校単位の取り組みには至っていませんが、個人としては少しずつ実践が広がってきています。なかでも荻戸先生は、9年前に新採用教員として前橋南高等学校に赴任した時からこの理念に刺激を受け、自らも実践を深めてきました。その面ではおそらく県内では先駆的な存在といえます。

## 校長先生も認める指導力

6月21日（金）、控え室で対応してくれた外山校長は開口一番、「荻戸さんの授業はいいですよ。多くの先生にも見てもらいたいのと思っているんですよ。新しい刺激を受けないと授業はどうも一方通行になってしまいがちですが、荻戸さんの授業は生徒の理解を確かめながらすすめている」と高く評価しました。

教室に向かう途中、生徒から次々と大きな声で挨拶を受けました。工業高校ということもあり、男子の元気な挨拶が心地よく響きます。1限目（電子機械科）と2限目（工業化学科）の2年生の授業を見せて頂きました。

## 1 限目は「常用対数の応用」 4人グループで考える

- 問1 常用対数の良さを確認する  
問2  $2^{100}$  の桁数を考えよう。  
問3  $2^{100}$  の最高位の数はいくつか？  
※  $2^{100}$  の1の位の数はいくつか？

1 限目の授業は荻戸さんが担任をしているクラスです。1年次から3年次まで持ち上げのクラスです。つまり生徒たちは既に1年次で荻戸さんの授業スタイルに触れていることとなります。荻戸さんは、授業開始の挨拶が終わるとスッと授業の本題に入っていました。静かな語り口です。授業の題材は「常用対数の応用」で、前時の確認から入りました。生徒たちに「常用対数の良さは何だったろう？」と問いを投げかけながら反応を確認しているように見えました。次に常用対数の問

題が出されました。ここでいわゆるグループをつくっての学習に入りました。机を寄せ合い4人一組になります。グループの中ではリーダーがいるわけでもなく、自然とそれぞれが自分の考えを述べ、やりとりをしています。分からないときはグループの人に聞いています。荻戸さんはそれぞれのグループにちょっと顔を出しては反応を見えています。グループの中に理解が進まない生徒がいると、答えを直に教えてしまうのではなく、キャッチボールをしているかのように見えます。



*log<sub>a</sub>x log<sub>a</sub>x log<sub>a</sub>x log<sub>a</sub>x log<sub>a</sub>x log<sub>a</sub>x log<sub>a</sub>x*

### 聴き合い学び合う教室

教室の右上には「学びの共同体」の基本的な考えが掲示してあります。荻戸さんが他県の公開授業に行った時に、そのクラスに貼ってあった言葉が気に入って同じように掲示したと言っていました。分からないことを分からないままにしない、分からないことは何度でも聞くということが、先生と生徒のキャッ

チボールであり、生徒同士でのキャッチボールになっていると思いました。

「落ちこぼれをつくらない、あきらめない、全ての生徒の学力を保障する」と言う荻戸さんは、机間巡視では意識的に、点が取れない、数学を苦手になっている生徒に目をかけているそうです。

### 「待つ」姿が印象的

二つのクラスの授業を見て印象的だったのは、荻戸先生の「待つ」姿勢です。決して急かせずじっくりと時間を掛け、生徒同士の話し合いを保障しています。1 限目の授業での時間内の問いはたったの二つでした。しかし、単元のポイントをおさえた問いだからこそ、それで十分なのだと思います。生徒が主体的に学ぶとはこういうことだと感じました。

(須田章七郎)

#### 聴きあい学び合う教室

- こんなことができる生徒になればいい♪
- 話している人の顔を見ながら聴こう。
  - どこでそう思ったのかを考えながら聴こう。
  - 「わからない」を大切にしよう。
  - 「ねえ、これどうやるの？」と仲間に聴こう。
  - 「ねえ、これどういう意味？」と仲間に聴こう。
  - 「もう1回言って」とわかるまで聴こう。

## 「数学が一番好き！友だちに教えてもらえる。」…生徒に聞きました

授業が終って休み時間に、幾人かの生徒に感想を聞いてみました。

### ＜先生の授業と他の授業と、 どう違うの？＞

- ◎「グループでみんなで話し合って考える時間がある。」
- ◎「自分と違う意見が聞けて、メンバーとコミュニケーションがとれる。」
- ◎「中学の頃はほんとに先生が黒板に問題書いて、答えを写して・・・ばっかりだったから。」
- ◎「先生が一人で教えていると、(生徒は)質問できなくなったりするじゃないですか。」
- ◎「数学が一番好きです。グループになると、わかんないところを友だちに

教えてもらえる。最初はとまどったけど。」  
◎「助け合えるところがいいと思います。」  
◎「わかんないところがわかるようになる。」  
◎「他の授業と比べておもしろい。わかりやすい。」  
(インタビュー：瀧口典子)



*logax logax logax*

## 位戸先生からのメッセージ

*logax logax logax*

### 時代が変われば教育も変わる

ぐんま教育文化フォーラムの皆様、ご参観いただきありがとうございました。

さて、なぜ私がグループ学習を取り入れているのかその背景をここに記します。率直に言えば時代の変遷に伴い教育の姿も変わる必要があると考えています。

### 協同的な学びが一つの方法

戦後復興から高度成長期では生産性の向上と産業の発達途中ということもあり、現代の学生よりも個々の学習意欲も高かったと考えられます。そのため、管理的で画一的な一斉授業の展開された教室でも十分に教育機能を果たしていたと考えます。一方、現代の子ども達は物にあふれ、豊かで不自由のない生活を過ごしています。このため、他の先進国と同様に子ども達の学習意欲が低いことは自然なことです。しかし、ポスト産業主義の到来により、産業の中心が対人サービスや情報産

業に変わり、そのため企業や社会はより高度な情報技術や知識をもつ人物を求めているのが現状です。教育はそれに対応するために質を重視し、より高いレベルの知識を習得できる場を提供しなければなりません。しかし、多くの生徒は一人ではそのような高い知識を習得したり問題解決したりできません。この打開策の一つとしてグループ学習等の協同的な学びによる問題解決が必要です。

### 教室は生徒の居場所

経済の成長と平行して核家族化や都市化による地域共同体の崩壊、それを受けての家庭の崩壊、さらには学校の崩壊へと問題が顕在化してきました。このような時代の変遷の影響を受け、現在精神的に不安定な生徒が多くなっていることは明らかです。これに対応するために学校がセカンドホームのように安心して様々なケアを受けられる場になることが必要であり、教室は生徒個々にとって居場所となる場であるべきであり、同時に格差リス

ク社会や多文化共生社会に対応するために個々の考えを尊重し、互いに認め合う民主的な場でもあるべきであります。これらの問題に対してもグループ学習等の協同的な学びで培える理念が今後の社会を生きる上で必要な力を付けさせる方法だと考えます。

## 佐藤学氏の講演に共感して

上記の話を2008年第63回関東都県算数・数学教育研究大会群馬大会においての佐藤学先生（学習院大学教授）からご講演をいただきました。この内容は私が大学時代から社会について考察してきたことと多くの面で一貫していたこともあり、強く共感を覚えました。これを機にグループ学習の探求を行っています。（今年で5年目）

### 「市民性」というキーワード

私は本校4年目となります。1年目、教室では自分勝手な発言や自己主張がぶつかって互いをいがみあう生徒たち、それらをわれ聞せずと静かに我慢している生徒達、テストだけはなんとかやり過ごしながら授業中は何もしない生徒、それ以前に全く学ぶ意志がない生徒、数は決して多くはありませんがそのような生徒らに直面しました。前任校である前橋南高校で培ったグループ学習の実践を継続して進めましたが、手ごたえは感じられなかったのが事実です。2年目の授業でも手ごたえが感じられず、やはり自分勝手な発言や自己主張がぶつかって互いをいがみあう生徒の存在が現れ、クラスの雰囲気や乱し、真に学び合えていないことを感じていました。しか

し、その中で前橋南高校での実践では必要性を感じなかった「市民性」というキーワードの重要性に気付きました。そこで、2年目の途中から、授業という公的な場で互いを認め合い、いがみ合ったりしない民主的な集団、市民性がある集団を育むためにはどうしたらよいかを考え始めました。3年目では1学年の担任となり、前年までの考えを精錬して実践を続け、今に至っています。グループ学習を行うにあたり、市民性のある集団の確立と質の高い学びとの同時追求がいかにか重要であるかを改めて実感しています。今後も誰一人諦めることなく、教室にいるすべての生徒の学びを保障するために日々実践を積み上げていきます。興味のあるかたは遠慮せず一度ぜひ教室を見に来てはいかがでしょうか？



*loga x loga x loga x loga x loga x loga x loga x loga x*

## 具体的な手立ては何？もう一度、荻戸先生に聞きたい！

荻戸先生から前述の内容の原稿を頂いた後、編集部では、「市民性のある集団の確立」のためにどのような具体的な方法を用いたのですか？と重ねて質問しました。先生は丁寧なお返事を下さいましたが、その内容

はとてもわかりやすいものですが、決して難しい内容ではありませんでした。以下に紹介します。

◇課題の設定について

・課題が易しすぎると協同的な学びは成立

しない。高いレベルの課題を設定する。

・10 教えることを 10 教えようと思わない。教材の精選が重要。

#### ◇授業構成の観点

- ・教師が生徒の様子を十分に把握し、生徒と密に関わることができるようにするため、授業プランを複雑にしないようにする。
- ・生徒の進行状況を見て随時授業プランを変更し、授業をデザインする。
- ・授業の始まりを大事にする。

#### ◇教師の働きかけ

- ・対話的コミュニケーションの基本は聴くことなので、教師や生徒の発言を聴く。生徒の発言に対し、教師は極力復唱せず、他の生徒が聴くことに集中させるようにする。
- ・生徒一人一人の状況を常に把握し、授業に集中させるため、すべての神経を生徒に向けられるように努力する。そのため、全員が見られる位置に立つ。
- ・生徒の学ぶ時間の確保と学ぼうとする姿勢を育てるため、教師は必要最低限度の言葉だけ発する。教師に質問するのではなく

仲間に聴くことを勧める。

- ・上下関係を生む「教えて、教わって」という言葉を教師は使わないで「答えて、聴いて」という言葉を使うようにする。
- ・テンションを落として話す。
- ・生徒の発言を他の生徒が聴けるように配慮する。

## ビジョンと哲学

グループ学習の方法を知りたくて2009年に茅ヶ崎市立浜之郷小学校の研究会に参加しました。ところが、授業方法については議論すべきことではなく、何よりも重要なことは「教師としてのビジョンと哲学を持つ」ことであるという話をいただきました。確かに、実践を進めている中で授業方法よりもどのような生徒を育てたいのか、なぜその教材を扱うのか、何のための授業か、教材に対する思いなど教職に携わる者としての専門的教養と市民的教養を追求していくことがなによりも重要であるのだと改めて感じています。

## 荻戸さんの授業を見て感じた「共同学習の心」落ちこぼれを作らない！あきらめさせない！

元高校数学教師 彦部 一雄

数年前に、官制研修（文部科学省や教育委員会の主導で開催される研修）の数学研究会で佐藤学氏の「学びの共同体」の話聞いた。それがきっかけで“グループ学習”を始めたという荻戸さんという。私も佐藤氏の講演に深い感銘を受けた。が、自分で実践する若さ（？）がなかった。学びの共同体というグループ学習を今の学校体制の中でやるのは大変だと思っていたからだ。今の学校はテストによって点数をつけ、その点数によって序列をつけ、選別している。『すべての子どもを賢く、すこやかに育てる』という本来の目標を忘れていた。



荻戸さんから何度かビデオを見せてもらったので、多少授業の内容はわかっていた。しかし、実際に授業を見て、落ち着いた教室の雰囲気に関心させられた。一般的に、睡眠率が1～2割あるという高校の授業である。が、私語や内職もなく教師から出される問いに生徒は主体的に取り組んでいた。他の数人

の先生が見ていたということもあるだろうが、多少割り引いてもそれは日常的な光景だろう。また、あるグループでのやりとりを聞いていて

感じたことだが、教え合いの関係が一方通行ではなかった。このような関係を生徒の中につくっていれば、今問題になっている“いじめ”もおきないと思う。

本来、生徒は仲間とわいわいと議論したり考えたりするのは好きなのだろう。それが、学校の体制など吹き飛ばしてしまうのだろう。そんな可能性をみせてくれた。もちろん、ここまでもってくるには、教師の姿勢が問われるのだろうが……。

荏戸さんの教室の前方には、「聴き合い学び合う教室」と題した模造紙が大きく貼ってある。(11ページ参照)

授業後の懇談で荏戸さんは、成功のこつは教材研究と言っていたが、それだけではない共同学習の心(上記のことかな?)があると

思う。落ちこぼれをつくらない。生徒にあきらめさせない。できない子をどうするか。数学が得意な生徒より苦手な生徒を大事にするという荏戸さんの日々の指導が大きいと思う。もちろん、教材研究は大前提であるが……。

荏戸さんの口癖は“数学は美しい。”問題が解けるとか点数がとれるから数学が好きということがあってもよいが、できなくても数学が好きだという生徒が出てくることを期待している。

習熟度別授業やドリルによる鍛錬主義が横行している現在、これは大きな挑戦であると思うのだが、荏戸さんは自然体でおこなっている。(文責 彦部一雄)

## *loga x loga x loga x* 取材を終えて *loga x loga x loga x*

取材陣にとって荏戸先生の授業の見学はとも期待感がありました。多くの教師が挑戦してきた「学びの共同体授業」ですが、「うまくいかなかった」「おしゃべりの時間で終わってしまった」「授業の速度が遅れる」などの声のため息とともに聞かれていたからです。「ひたすら取り組み続けている荏戸先生には苦労はないのだろうか?」「はたしてうまくいっているのだろうか?」という疑問が膨らむ中、伊勢崎工業高校を訪問しました。結果は読んでいただいた通り、実に穏やかに進行し、教師や生徒の表情にストレスを感じさせない授業でした。しかも、定期試験の結果は他のクラスに劣るといえることはない。むしろ優れて

いるとのことでした。何より、生徒同士が落ち着いたコミュニケーションを経て彼らなりの答にたどり着いている様子に「学びの共同体」の姿を見ました。

取材後の荏戸先生とのやり取りでは、「具体的な対応方法」の質問に「教師のビジョンと哲学」の答が返ってきましたが、これは私たちすべての市民に投げかけられたメッセージであるとも感じました。

多忙中にも関わらず対応してくださった外山校長先生はじめ、伊勢崎工業高校のみなさん、ありがとうございました。

(取材・写真撮影：彦部一雄／若林孝範／須田章七郎／瀧口典子／倉林順一)

